沖縄文化協会 2023 年度公開研究発表会
第２回「沖縄文化協会外間守善賞」授賞式

日　時：2023 年 6 月 24 日（土）・25 日（日）（24 日 13 時～20 時 30 分、25 日 10 時～16 時）
場　所：沖縄国際大学 13 号館 301 教室（沖縄県宜野湾市宜野湾 2-6-1）
参加費：500 円（資料代）
※第２回「沖縄文化協会外間守善賞」授賞式は 6 月 24 日（土）17 時より行います。

全体スケジュール　　総合司会〈我部 大和〉

第１日（6 月 24 日）
13:00～13:10　開会の辞　西岡 敏（沖縄文化協会 2023 年度公開研究発表会実行委員長）
13:10～16:00　研究発表　6 月 24 日　午後の部
16:10～16:55　第２回「沖縄文化協会外間守善賞」受賞者による研究発表
17:00～17:20　第２回「沖縄文化協会外間守善賞」授賞式
18:00～20:30　受賞祝賀会および懇親会　　場所：沖縄国際大学　学生会館２階食堂
会費 一般:3000 円、一般発表者:2000 円、学生:1000 円　　司会〈阿利 よし乃〉

第２日（6 月 25 日）
10:00～12:25　研究発表　6 月 25 日　午前の部
12:25～13:30　休憩（昼食）
13:30～15:45　研究発表　6 月 25 日　午後の部
15:45～15:55　閉会の辞　仲原 穣（沖縄文化協会会長）

【研究発表　6 月 24 日　午後の部】　　司会

13:10～13:40　齋藤 和彦（森林総合研究所関西支所）　〈前田 勇樹〉
近代沖縄の旧慣林制改革は
杣山の地元に穏当な官地民木林整理だった

13:45～14:15　宮城 弘樹（沖縄国際大学）　〈山本 正昭〉
遺跡出土資料からみる琉球の指輪文化
―近世から近代の古墓出土資料を中心として―

14:20～14:50　大竹 有子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）　〈照屋 理〉
沖縄の衣生活に関する諸問題

14:55～15:25　松永 明（法政大学）・波照間 永子（明治大学）　〈我部 大和〉
古典女踊りにおける「袖を用いる技法」と歌詞の関係

15:30～16:00　樋口 美和子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）　〈鈴木 耕太〉
昆劇と組踊における様式性の比較
―新作組踊「春夜の夢～牡丹亭の梅と柳～」の創作プロセスをもとに―

【研究発表　6 月 25 日　午前の部】
10:00～10:30　阿部 暁之（北海道大学大学院博士後期課程）　〈田場 裕規〉
学校教育への空手の導入と展開
―沖縄県立中学校学友会の空手部に着目して―

10:35～11:05　近藤 健一郎（北海道大学）　〈嘉納 英明〉
琉球政府期における文部省派遣教育指導委員の選考

11:10～11:40　謝花 直美（同志社大学＜奄美-沖縄-琉球＞研究センター
嘱託研究員、沖縄大学地域研究所特別研究員）　〈中村 春菜〉
残留那覇市民と「愛生寮」
―戦時・占領期に重ねられた移動からの救済―

11:45～12:15　齋木 喜美子（関西学院大学）　〈小嶋 洋輔〉
戦後の「少年少女」を対象とした雑誌が醸成した「沖縄」観

【研究発表　6 月 25 日　午後の部】
13:30～14:00　岡田 一男（文化財映像研究会、東京シネマ新社）・
三島 まき（文化財映像研究会、学習院大学）　〈阿利 よし乃〉
シューリィキアシビ（朱付け儀礼）とニーブトゥイのティルル（神謡）
―「沖縄久高島のイザイホー」1978 年撮影、未公開映像記録から―

14:05～14:35　石垣 直（沖縄国際大学）　〈麻生 伸一〉
近世日本との比較で考える琉球の釈奠

14:40～15:10　玉城 弘（浦添市文化協会沖縄語部会）　〈中本 謙〉
伊勢物語に登場する「いひやる」を語源とする琉球語について

15:15～15:45　野原 優一（沖縄文化協会）　〈下地 賀代子〉
琉球宮古語の特殊な「中舌母音」の調音法

【沖縄文化協会 2023 年度公開研究発表会実行委員会】
〒901-2701 沖縄県宜野湾市宜野湾２－６－１　沖縄国際大学総合文化学部
西岡敏研究室内：Tel 098-893-0288　E-mail：okinawabunka2023@gmail.com
【沖縄文化協会】Tel&Fax 098-887-2652（担当：前野涼子）

【24 日　13：10～13：40】

近代沖縄の旧慣林制改革は杣山の地元に穏当な官地民木林整理だった

齋藤 和彦（森林総合研究所関西支所）

近代沖縄の旧慣林制改革は、1899-1903（明治 32-36）年の土地整理、1906-1908（明治 39-41）年の杣山整理の 2 段階でなされた（仲間勇栄 1980 他）。この改革は、既往の理解では、杣山の地元に厳しい内容だったとされた。すなわち、林制改革に先立つ杣山開墾では、地元の入会林である杣山で特権階級による開墾が許可され、林制改革第一段の土地整理では、「官地民木」というごまかし策で杣山が官有化されて住民利用が排除され、第二段の杣山整理では、先の特権階級の開墾地が格安で払い下げられる一方、本来、無償であるべき地元にも有償で払い下げられ、永年巨額の支払に苦しめられたとされた。

この理解の端緒は、親泊（大里）康永氏の『義人謝花昇伝』（1935）である。同書は、戦後 3 回改版され、貴重な戦前の資料として『沖縄県史』シリーズを始め、戦後公刊された沖縄近代史の図書、論文、新聞等の記事で多数引用された。その結果、林政史に限らず沖縄の近代史観全般に影響を与えた。

ただ、同書の杣山開墾や県庁人事、民権運動の記述は、新川明氏の『異族と天皇の国家』（1973）や田里修氏の『沖縄県における自由民権運動』（1994）、伊佐眞一氏の『謝花昇集』（1998）等による批判・検証がなされてきた。しかし、土地整理における官地民木論や杣山整理における不要存置の土地の払い下げといった林制改革の記述は、ほぼそのまま受け入れられてきた。

そうした中、同書の林制改革の記述を早くから批判してきたのは来間泰男氏である。来間氏は『沖縄県史 1 通史』（1976）の「土地整理事業」の項で、1）土地整理の山林の処分は実質的に留保だった、2）土地整理の後、住民利用は制限されなかった、3）杣山整理で地元が支払った土地代金が莫大というのは誇張であると指摘した。

これに対し本研究は、1）と 3）について、新たな資料と法規にもとづき別の角度から検証した。その結果、1）については、法規と他府県の例から、沖縄の旧慣林制改革は、土地整理で土地、杣山整理で毛上という「土地－毛上の 2 段階改革」であり、特に杣山整理は、通常、人工林だけのところを撫育天然林も地元に譲与した「穏当な官地民木林整理」だったこと、3）については、各間切の土地代金、1910（明治 43）年の本籍戸数、1908（明治 41）年の久志・金武の浜渡し薪価格から、15 年年賦として毎月一戸が供出する薪束数を間切単位で試算し、最も多い久志で 3.7 束／月／戸と、こちらも穏当だったことを明らかにした。

さらに沖縄の旧慣林制改革が地元に穏当だった理由として、杣山整理の所管省庁が、当初の農商務省に大蔵省が加わった点に注目した。当時、大蔵省は間切吏員費の国費解消や土地整理前の旧租滞納への対処を迫られており、これが地元負担を軽減し、地域経済鞏固につながる事業内容を生みだした可能性を指摘した。

【24 日　13：45～14：15】

遺跡出土資料からみる琉球の指輪文化

―近世から近代の古墓出土資料を中心として―

宮城 弘樹（沖縄国際大学）

本発表は、主に近世から近代の古墓の発掘調査によって出土した指輪から、琉球王国時代から、一部近代沖縄の指輪文化について考察することを目的とする。

琉球の装身具の一つに指輪があることは広く知られている。これは 15 世紀半ば、王国時代からあったとされる（久保 2010）。その編年、身に着ける指や性別については民俗伝承がいくつか紹介されるものがあるものの（宮里 1979・ほか）、同時代資料に乏しく詳細は不明なところが多い。

そこで、遺跡出土指輪の集成を行い年代観や、装着される指についての考察を行った。集成の結果 42 遺跡、150 地点、382 点の出土例が確認された。確認された遺跡の大半は遺跡を覆う包含層からの出土であるが、８例の指輪を指に嵌めた状態で人骨に伴う例が確認されている。ここから得られる情報として、指輪を嵌める人物と指輪の関係。装着部位（右手なのか、左手なのか、あるいは中指なのか薬指なのか）を知ることができた。

加えて厨子甕の中から出土する 27 件の事例から、厨子甕の型式学的検討、納骨された人骨との関係、銘書を検討することで、指輪の時間的推移についての考察が可能となる。具体的には、近世から近代の出土指輪について、民俗調査や金工品調査などを参考に分類し、指輪デザインの時間的推移をおおよそ把握することができた。

出土指輪から、確実に 15～17 世紀として比定される例は少ない。このため、今回の発表ではグスク時代の指輪文化についての検討は保留する。比較的事例のまとまっている、古墓出土の厨子を用いて、年代比定が確定できる例から、1700 年代頃からは存在していたと推察された。江戸の指輪文化については、長崎の出土例や 1800 年前後の北川歌麿の美人画に描かれているものがあるものの、一般には江戸時代には根付いていないとされる（宮坂 2020）。沖縄の出土例から、1700 年代頃に琉球の人びとの間で指輪文化が普及していたのであれば、江戸と対比すると特筆するべきと考える。

課題としては、今回は発掘資料を中心に紹介するが、博物館等に所蔵される伝世品との比較研究や、文献、絵図資料、あるいは近代の例については写真資料や新聞等を用いた調査を行うことで、指輪文化についてより立体的に描けるものと考えている。

≪参考文献≫

沖縄県教育庁文化課（編）2008『沖縄の金工品関係資料調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第 146 集（沖縄県史料調査シリーズ第 4 集）沖縄県教育委員会

久保智康 2010『日本の美術－琉球の金工－』第 533 号 ぎょうせい

宮坂敦子 2020『すぐわかる日本の装身具－「飾り」と「装い」の文化史－』東京美術

宮里朝光 1979「指輪」『那覇市史』資料篇第 2 巻中の 7 那覇市の民俗　那覇市企画部史料編集室

【24 日　14：20～14：50】

沖縄の衣生活に関する諸問題

大竹 有子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）

衣装・衣生活は、個人的な領域であるとともに、帰属意識や自己表現のひとつの手段であることは言を俟たない。また一方では、時代や社会状況や生活習慣に多大な影響を受ける。それゆえに衣生活は、趣味や美意識にとどまらず、その社会の一端を反映する鏡ともいえる。

日本の地域研究における沖縄学、さらには県民およびルーツを持つ人々のアイデンティティは、他府県のそれに比して意気軒昂であることは事実であろう。ただし衣生活についてみると、必ずしもその意識が反映されてはいないように思われる。端的に言えば、アイデンティティの根源が求められる古い時代からの伝統衣装、いわゆる琉装は、日常着としての地位を失っている。本発表では、この現状に至った過程を整理することを中心に、沖縄の衣生活に関する考察の問題点と今後の研究の課題を指摘・整理したい。

沖縄の衣生活に関する考察と一口に言っても、問題点は枚挙にいとまがない。まずは「琉装」の定義である。筆者は古謡の中で衣生活に関する表現を概観したことがあるが（『沖縄芸術の科学』第 34 号、2022 年）、研究ノートの段階であるので、さらに事例・分析を増補した考察が必要である。

現状における課題は、琉装が日常着であった時代の記憶を、可能な限り多く・詳しく記録することである。聞き取り調査と共に、著者に可能な方法としては、主に近代以降の種々の文字記録や写真・映像の中の服飾をデータベース化することである。聞き取り・データベース化双方において、琉装に関わる立場は様々である。まず想定されるのは着る側・製作する側である。とくに製作、具体的には染織・縫製については、美術・工芸の分野には先行研究が多いが、衣生活の視点をもっと大きく掲げるべきであろう。とくに現代において、観光や文化政策、また縫製や販売に関わる立場からの琉装のありかたについては未開の沃野といえよう。これらの点について当事者がそれぞれ発表した成果は散見されるが、まとめて俯瞰し、時代や立場を超えた検討を加えることが必要である。

研究における定義とは別に、芸能や工芸、近年では観光やイベントにおける琉装は、表現方法であるがゆえに必ずしも習慣に忠実であるとは限らない。これらのイメージが雑然と共有されているのが現状である。これらを誤りとして一蹴する見方もあるかもしれないが、なぜそうしたイメージが発生したのか、忠実でない箇所はどこで、なぜ忠実ではないのか、などを検討することにより、衣生活にとどまらない沖縄文化の一端をみることができよう。

発表では以上のような課題について、現在提示することができる実例や資料を提示して整理する。繰り返しになるが本発表は成果ではなく、問題点の提示とまとめである。また古謡の物質文化に着目してきた筆者のテーマとは別の問題とみられるかもしれないが、沖縄文化の一面を古謡の時代から現在まで通時的にみるという方法の試論ともしたい。

【24 日　14：55～15：25】

古典女踊りにおける「袖を用いる技法」と歌詞の関係

松永 明（法政大学）・波照間 永子（明治大学）

本発表は琉球古典舞踊の詞章と舞踊技法の関連について文学及び舞踊学の視点から考察する一環として、琉球舞踊の中核をなすともいわれる古典女踊りにおける「袖を用いる技法」と歌詞の関連について分析し考察を加えようとするものである。

波照間ほか（2019）は古典女踊り《諸屯》《伊野波節》《柳》《本嘉手久》における「袖を用いる技法」として、「袖合わせ」「袖とり」「袖とりあごあて」「忍ぶの手」の 4 種を抽出して整理し、それぞれの技法の表現特性を歌詞と対照させて論じている。これら「袖を用いる技法」は、多彩であると同時に洗練もされている。袖は衣服の一部でありながら、登場人物の心情を可視化させたり、登場人物の行動を卓立強調したりするための重要な道具としても効果的に用いられているのである。

例えば《諸屯》の入羽「しゃうんがない節」は、

「別て面影の　立たわ伽めしゃうれ　馴れし匂ひ袖に　移ちあもの　ヨンナササ　ションガネスリー　ションガーネ」(別れて面影が　浮かんだら慰めにして下さい　慣れ親しんだ匂いを袖に　移してあるから（ヨンナササ　ションガネスリー　ションガーネ))

と歌われ、下線部において「袖とり」の所作が行われる。これは歌詞にある「匂いを袖に移す」動作を卓立強調しているのは無論であるが、同時に両袖を手で取り持ちあげたのちに目線を左袖の袂に落とす所作が使われる。これは、かつての恋人との共寝の回顧と思慕、そして恋人の不在を嘆く人物の心情が袖に仮託されていると解されるのである。

また同じ《諸屯》の中踊り「諸屯節」は、

「枕並たる　夢のつれなさよ　サトゥヌシヨ　月や西下て　恋し（冬の*）夜半　アリサトゥヌシヨ」（枕を並べた夢の無情さよ（里主よ）月は西に傾いて恋しい（冬の*）夜更けであるよ（あれ里主よ））

と歌われ、下線部において「袖合わせ」の所作が行われる。前者と異なり後者では歌詞と「袖」との直接的な対応はないものの、「袖合わせ」という所作は、本土の「そで打ち合わす（相手を敬いかしこまる)」表現に重なる。このため当該場面において「袖合わせ」は、共寝したはずの相手を、夢が覚めたのち長時間恭敬恋慕している表現と解することができる。そしてその後の囃子詞「アリサトゥヌシヨ」においては「抱き手→返し手（コネリ手)」の所作が展開されるゆえ、下線部以降は現実では成就しなかった相手との共寝を仮想する女性の心情が仮託されていると解されるのである。

このように「袖を用いる技法」が発達・洗練されているのは、オモロや古謡から見られる、袖に呪性や心情を仮託する長い歴史的背景に加え、舞踊や歌の主題の深い理解の上に立ち、創意工夫を重ね伝承してきた先人達の営為によるものと考えられる。

《引用・参照文献》

波照間永子ほか（2019)「琉球舞踊にみる衣装『袖』と身体技法－韓国舞踊との比較の試み」,寒川恒夫研究室編『スポーツ人類学の世界』，虹色社：169-183

琉球古典音楽安冨祖流絃声会（初版 2001,2007 訂正)「諸屯節」「しやうんがない節」，琉球古典音楽安冨祖流絃声会著『安冨祖流舞踊地謡工工四第一巻』，安冨祖流絃声会：13, 14、フリガナは省略した。また（　）内の現代語訳は松永による。

＊野村流では「恋し」ではなく「冬の」の歌詞でうたわれる。

(JSPS 科研費 20H01221)

【24 日　15：30～16：00】

昆劇と組踊における様式性の比較

―新作組踊「春夜の夢～牡丹亭の梅と柳～」の創作プロセスをもとに―

樋口 美和子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）

昆劇とは冊封使録で知られる徐葆光の出身地・江蘇省の昆山一帯で元朝末期から明朝初期に誕生し、清朝初期まで人気を博した戯劇である。中でも『牡丹亭』は昆劇の代表的な作品と位置づけられ、1822（道光 2）年 12 月 29 日、中国の紫禁城にて琉球の進貢使節などが清朝皇帝と共に『牡丹亭』の第 23 場「冥判」を観劇したという記録が残されている[i]。

拙稿[ii]において、昆劇の代表的作品である『牡丹亭』にみられる柳・牡丹・梅のモティーフや物語展開、動作、衣装、小道具について琉球古典女踊り「柳」との類似性を検討し、昆劇『牡丹亭』が抽象化され琉球舞踊古典女踊り「柳」へと昇華された可能性を指摘した。これを踏まえ『牡丹亭』をもとに、可能な限り組踊の様式を踏襲するよう心掛け創作したのが新作組踊「春夜の夢～牡丹亭の梅と柳～」[iii]（以下、新作組踊「春夜の夢」）である。本作品の創作プロセスにおいて、従来の組踊には見られない「夢の中」「冥界」といった場面展開や「花神」「閻魔」といった人間ではない役柄を、組踊としてどのように表現するかという点に苦慮した。

その結果、昆劇と組踊の共通点として役柄によって唱（節回し）や動作（仕草）が化粧や衣装等が決まる点、時間進行が一定で過去へ戻たったりすることが無い点、大道具がほとんど用いられない点などが見られた。一方、昆劇では楽器の演奏者は歌わない点、現実世界以外の場面展開（夢の中、冥界）、生きている人間以外の役柄（花神、閻魔、幽霊）等の相違点が見られた。

本発表では新作組踊「春夜の夢」の創作プロセスをもとに、『組踊異表題一覧』[iv]の 73 作品の中から王府による冊封関係での上演が確認できる 24 作品と昆劇『牡丹亭』を比較し、組踊の様式性について考察を行う。

《註》

ⅰ我部大和 2018『冠船芸能で上演された組踊の基礎的研究 演戯故事と組踊台本との内容比較を中心に 』琉球大学大学院人文社会科学研究科博士論文,31.

ⅱ①樋口美和子 2022『近世から現代に至る琉球・沖縄の女踊りの身体的表現に見る変化と不変の美―昆劇『牡丹亭』から「柳」への抽象化のプロセスに着目して―』沖縄県立芸術大学大学院博士論文. ②樋口美和子・小西潤子 2022「琉球舞踊古典女踊り「柳」にみる日琉の往来と中国からの影響―「天川」との歌詞、拍節構造、下肢の動作の比較分析による―」『ムーサ沖縄県立芸術大学音楽学研究誌』23,29-40.

ⅲ高嶺（樋口）美和子作, 2022 年 7 月 24 日初演,国立劇場おきなわ小劇場.

ⅳ鈴木耕太 2023「「新発見」の組踊三件」『沖縄県立芸術大学芸術文化研究所紀要』35,18-23.

【25 日　10：00～10：30】

学校教育への空手の導入と展開

―沖縄県立中学校学友会の空手部に着目して―

阿部 暁之（北海道大学大学院博士後期課程）

空手は[1]、1905 年に沖縄県立中学校（以下、中学校）へ導入されたことが、学校教育への本格的な導入の嚆矢であった。これ以降、空手は体系化や普及が前進し、近代化を迎えることとなる。

近代化の画期となったこうした導入について、盧姜威は「正課体育としての“空手”の学校教育への導入時期はいつであったのか」という問いのもとで議論を進め[2]、嘉手苅徹も「1905 年に、唐手は中学校で正科の一部として採用され」たことや、「体操科」に「唐手が正科同様に導入され」たことを繰り返し確認している[3]。つまり、中学校への空手の導入については、1905 年にいわゆる授業の体育として採用されたと解釈することで安着している。こうした解釈は『沖縄県版　学校体育における空手道指導書』において「糸洲安恒は（中略）「唐手（からて）」を（中略）1905（明治 38）年、沖縄県立中学校において、初めて正課（科）体育として指導した」と説明されていることからも[4]、既に一般化しつつあると言ってよい。

しかし、中学校の学友会誌である『球陽』によれば、「学友会に唐手部を置きし以来、日尚浅けれども、糸洲先生の熱誠と部員の精励とを以て漸く発達し来れり。此技術は本県の特技として、誇るに足るべき武術なれば、二学年にては体操科の一部としてこれを課せり」とあることから[5]、中学校への空手の導入の起点として、これまで着目されていた体操科に加え、学友会空手部（以下、空手部）も想定されるべきことが明らかである。さらに、空手部は盛んな活動のもとで「発達」したことが明示されている一方、体操科は「課」されたこと以上の言及がなされていない。このことから、中学校における空手は、空手部と体操科とでは前者を中心として展開された可能性も示唆されよう。少なくとも、現状、空手部は研究対象として看過され、中学校における空手の導入と展開をめぐる研究は実態に即していない状況にある。

そこで、本発表は、空手部に着目した課題を設定する。基礎史料は、これまでに十分な研究蓄積がない教育関係史料（『沖縄教育』『球陽』『学友会雑誌』『養秀』）とする。そして、空手部の活動に関わる諸記録の分析を通じ、空手の学校教育導入について再検討することを試みる。対象時期については、空手部が創設された 1905 年から、史料的限界となる 1934 年までとする。

《註》

[1]「空手」の表記を基本とするが、史料引用に際しては史料の表記に準ずる。

[2] 盧姜威「近代沖縄“空手”の普及発展」沖縄県立芸術大学附属研究所編『沖縄芸術の科学―沖縄県立芸術大学附属研究所紀要―』23 号、沖縄県立芸術大学附属研究所、2011 年、59 頁。

[3] 小山正辰・和田光二・嘉手苅徹『空手道　その歴史と技法』日本武道館、2020 年、49、51 頁。

[4] 沖縄県教育庁保健体育課『沖縄県版　学校体育における空手道指導書』沖縄県教育委員会、2017 年、3 頁。

[5]「唐手部記事」『球陽』18 号、沖縄県立中学校学友会、1909 年、116 頁。

【25 日　10：35～11：05】

琉球政府期における文部省派遣教育指導委員の選考

近藤 健一郎（北海道大学）

アメリカ統治下の沖縄では、1950 年代以降、日本政府による「沖縄援助」が教育分野において他の分野に先行して展開した。当初は、日本本土の大学への「留学」など沖縄から派遣するものであったが、1953 年からは教員の免許状取得・上進などの単位修得のための認定講習に日本本土から講師を沖縄へ派遣することが始まった。そうしたなかで、1959 年から、日本の文部省は、沖縄の学校等へ教員研修の指導者として「教育指導委員」を派遣し始めた。この教育指導委員は、日本の教育課程や教育実践を沖縄の学校へもたらす役割を果たした。

発表者は、この教育指導委員に注目して、その制度の創設と展開過程について「琉球政府期の沖縄への教育指導委員派遣」（日本教育学会『教育学研究』第 86 巻第 4 号、2019 年）を、またその指導の実態の一端を「1960 年前後の沖縄における教育研究団体の結成と組織化への文部省派遣教育指導委員の関与―国語科を中心に」（日本教育史研究会『日本教育史研究』第 40 号、2021 年）において明らかにしている。しかしながら、「教育指導委員」はどのように選考されたのかについて、先行研究も発表者も明らかにできていない。この問いは、かつて浅野誠が「教育指導委員」について「文部省の『お墨つき』の人々」（『沖縄教育の反省と提案』明治図書、1983 年、61 ページ）であるとしたことを実証的に検討することであり、沖縄の教育実践に影響を与えた「指導」がどのような人々によってなされたのかを明らかにすることである。

本発表は、教育指導委員がどのように選考されたのかを解明することを通じて、アメリカ統治下にあり日本政府の施政権が及んでいなかった時期の沖縄において、文部省の政策や日本の教育実践が、人的にも文部省の強い関与のもとで展開していくことを実証することを目的としている。

この目的を達成するために、以下の構成で本発表を進める。

１、教育指導委員の選考要領

教育指導委員を選考する規程の変遷を公文書に基づき明らかにする。

２、教育指導委員の属性

教育指導委員として派遣された、のべ 276 名（沖縄県教育委員会『沖縄の戦後教育史』1977 年、674～677 ページ）の属性について、本務、出身地、担当について、統計的に明らかにする。

３、教育指導委員選考の実態

教育指導委員として派遣された人のなかには、帰任直後あるいは後年の著作において、選考の経緯に言及しているものがある。それとあわせて、選考、派遣されるまでに、どのような発表や活動をしていたかをたどることから、選考の実態を明らかにする。

これらにより、教育指導委員としての選考を制度と実態において明らかにしていくのが本発表である。なお、本発表の基本史料は、国立公文書館所蔵の教育指導委員関係史料であり、教育指導委員の執筆した著書等である。

【25 日　11：10～11：40】

残留那覇市民と「愛生寮」

―戦時・占領期に重ねられた移動からの救済―

謝花 直美（同志社大学＜奄美-沖縄-琉球＞研究センター嘱託研究員、
沖縄大学地域研究所特別研究員）

本報告は、沖縄戦時の沖縄島北部への「立退き」と避難、占領初期の収容地区への収容という繰り返された移動によって、帰還できず残留した旧那覇市民（以下、残留那覇市民）の経験を考察する(註1)。沖縄戦中から軍用地となった旧那覇市の開放が遅れたことによって残留那覇市民は戦争が終わって長い年月を収容地区だった場所で暮らさざるを得なかった。他町村の人々の移動とは異なり、旧那覇市民は自力で軍労働など就労による移動チャンスを得て、収容地区から移動したためである。残された市民とは、就労できない女性や高齢者、子どもたちだけの家族で、働き手となる父親や兄、息子たちを戦争で失った人々だった(註2)。

旧那覇市はこうした人々のために、独自の社会事業として救済家屋（後の愛生寮）を市内に建築し、受け入れを始める。当初は手探りだった市の支援も、復興とともに全琉で救済制度や生活保護が整えられるにつれて、救済家屋もそれと関連づけて整備・運営されるようになる。しかし、救済家屋は法内に位置づけられると同時に、運営は枠組みに縛られるようになった。残留那覇市民の人々の間には、救済基準や生活保護によって経済的境界線がひかれ、誰を愛生寮に受け入れるかが決められていった。その結果、救済や保護から脱するための一時的施設となった愛生寮では永続的に住めない不安定な居場所となって、住む者のコミュニティーをつくりづらい場所となった。同時に施設周辺の人々からは「迷惑施設」としてみられた。占領初期に自力で移動できなかった残留那覇市民の経験は、福祉的に救済されることでその存在は福祉の枠組みの中に埋没して、顧みられず忘却されていったのである。

《註》

註１）従来、疎開と呼ばれてきた沖縄島北部への移動について本報告では「立退き」と表現する。これまで北部への移動は、「立退き」「疎開」などの用語が混在し、筆者も 2021 年論考で「引揚げ」を使用した。しかし、「疎開」はそもそも日本の都市圏の建物疎開、人口疎開の総称であり、戦場となる場所から日本軍の要請を受けて沖縄県が指導した移動とは性質が異なる。また、沖縄県民の移動であっても県外・海外への「疎開」と沖縄島北部山中への移動では実態に大きな相違がある。「立退き」が、日本軍が足手まといの住民を山岳地帯へ移動させたという実態を最も言い表している言葉として使用する。

註２）　拙著『戦後沖縄と復興の「異音」――米軍占領下　復興を求めた人々の生存と希望』有志舎、2021 年。

【25 日　11：45～12：15】

戦後の「少年少女」を対象とした雑誌が醸成した「沖縄」観

齋木 喜美子（関西学院大学）

第二次世界大戦後、日本児童文学は自由・平和・民主主義という価値観のもと、新たな一歩を踏み出した。終戦直後は紙やインクなどの資材不足や印刷事情の悪さから、児童書は「仙花紙」といわれる粗悪な再生紙で刊行されていたが、やがて民主的・芸術的児童文学を標榜する『赤とんぼ』（実業之日本社、1946.4）、『子供の広場』（新世界社、1946.4）、『銀河』（新潮社、1946.10）等の児童雑誌が次々と林立しはじめ、しばらくは活況を呈していた。しかし 1950 年前後を境に、10 代前半から後半までの「少年少女」を対象とした雑誌の出版ラッシュが興り、戦前からあった学年別雑誌と共にこれらの大衆的雑誌が多くの読者を獲得するようになっていった。だがこうした雑誌は、純児童文学に関わる児童文学者からは悪書として評価されがちであった。そのため内容については十分な検討がなされず、長い間いわば時代の徒花として扱われてきた経緯があった。

その後、佐藤忠雄が『思想の科学』に「少年の理想主義について―『少年倶楽部』の再評価」（中央公論社、1959）という評論を発表したのを機に、これら大衆的な雑誌にも目が向けられ始め、今では児童文学史のみならずジェンダー研究等の分野でも重要な研究対象として注目されるようになってきている。また雑誌を、その時代の歴史的ドキュメントとしてとらえるならば、多くの少年少女たちが進んで読みふけっていたこうした雑誌には、単に彼らが通俗的、娯楽的な要素に惹かれたというだけでは済まされない要素があったのではないか。そして間接的教育媒体として、当時の読者の思想形成に何らかの影響を与えたのではないかとも考えられる。しかもこうした大衆的な雑誌の隆盛期、転換期はちょうど沖縄の米国統治下に重なっている。にもかかわらずこの間に「沖縄」の話題が少年少女向けの雑誌でどのように取り上げられ読者に手渡されていたか、その背後にどういった「沖縄」観が織り込まれていたかを検討した先行研究はない。そこで発表者は，その実態を明らかにしたいと考えた。

まず発表者は、戦後から沖縄の施政権返還の 1972 年頃をめどに国立国会図書館国際子ども図書館の提供するデータベース「児童書総合目録」で、沖縄を取り扱った作品を調査してみた。その結果、小学館や学習研究社などの大手出版社が刊行していた学年別雑誌に、沖縄関連の記事や物語、漫画などを複数見出すことができた。取り上げられていたおもな内容は「ひめゆり」や「対馬丸」に代表される沖縄戦関連の物語、米国統治期の沖縄の課題に関するルポルタージュ、沖縄出身の文学者の詩やエッセイ等であった。本発表ではその書誌を報告するとともに、雑誌編集には利潤の追求だけではなく当時の少年少女に身につけてほしい「教養」としての「沖縄」観があったことを示す。

【25 日　13：30～14：00】

シューリィキアシビ（朱付け儀礼）とニーブトゥイのティルル（神謡）

―「沖縄久高島のイザイホー」1978 年撮影、未公開映像記録から―

岡田 一男（文化財映像研究会、東京シネマ新社）
三島 まき（文化財映像研究会、学習院大学）

文化財映像研究会は、1978 年のイザイホーの映像を高精細にデジタル化、アーカイブ化し後世に残すとともに、それを社会に還元し活用できるようにするというプロジェクトに取り組んでいる。本発表では、三日目のニーブトゥイ（男性神役）のティルルとシューリィキアシビの映像を公開し、ニーブトゥイと神女のティルル（神謡）に原音カタカナ表記と現代語訳をつけた。

イザイホーの映像記録は、これまでも何本か撮影されているが、ニーブトゥイが太鼓を打ちながら神謡を唱える全過程が撮影された映像は、他にはないと考えて良いであろう。本発表で、三島はこのティルルで唱えられる「ヤジョクター」は、『おもろさうし』における「やちよこ」であり、久高島やその他の地域の祭祀における「ヤジク」は、久高島での儀礼ばかりではなく、王府祭祀にとっても重要な役割を果たしていたことを指摘した(注1)。今回、この映像が公開されることによって、『おもろさうし』における「やちよこ」が、実際の祭りの現場において、どのような役割を果たしていたのか確認することができたのである。

ニーブトゥイのティルルでは、ヤジク集団が、ニライカナイから船を漕いで、久高島周辺から王権に関わりの深い聖地、最終的には首里城まで訪れると歌われる。この理由については、ヤジク集団がティダ（太陽）が穴から王権の根拠となるセヂを招請し、首里城までもたらすことが儀礼的に表現されているのではないかと考えられる。

現在でも沖縄の各地では、女性が集団となり、祭祀や舞踊（円舞）を行なうことによって、ユー（豊穣）をもたらし、生命力を強化する祭りが行なわれているが、首里王府は、基層にあるこのような信仰を取り入れ、全島に統一した信仰体系を築いていったのではないかと推測されるのである。そして、それは、伝統的な信仰に基づくものであったため、琉球王府が解体した後も、残ることができたと考えられる。

岡田は、同時期に行われるイラブー（エラブウミヘビ）の捕獲が、ニライカナイ信仰に深い関わりがあることについて指摘する。イラブーを管理する家が、かつては、アガリウプヌシ（東の大主）を受ける久高ノロ家であり、イラブーが、ニライカイナイからの使いであるとする伝承、また、久高ノロ、外間ノロ、外間根屋の三家で捕獲されていることから、たんなる食物ではなく、ニライカナイからのセヂをもたらす聖なる食物として、首里城に献上されていたのではないかという仮説を提出している(注2)。

また、イザイホーの 17 時間分の映像のアーカイブ化、データベース化を行ないながら、未公開映像をもとに今後は「沖縄久高島のイラブー」、イザイホーを新たに編集し直した作品を制作する予定で、これらについての報告も行ないたい。

注 1「沖縄・久高島の「フバワク」―祭祀歌謡に見られる「ヤジク」を中心に―」紀要『沖縄学』第 12 号　沖縄学研究所　2009 年 3 月

注 2「沖縄・久高島のイラブー」　民族文化の会（諏訪春雄 学習院大学名誉教授主宰）口頭発表（会場　黛民族舞踊文化財団）　2023 年 3 月 26 日

【25 日　14：05～14：35】

近世日本との比較で考える琉球の釈奠

石垣 直（沖縄国際大学）

琉球では、久米村の蔡堅が 17 世紀初頭に中国より孔子・四配の絵を持ち帰り、有志による孔子祭祀が始まった。1670 年代には紫金大夫・金正春の進言で王府支援による聖廟（後の久米至聖廟）建設が実現し、仲春・仲秋の上丁に孔子を祀る釈奠は、本格的に国家的祭礼の一つとなった。また 18 世紀初頭には同じく紫金大夫・程順則の建議によって学（明倫堂）が併設され、その奥には啓聖祠も備えられた。そして 1719 年からは、中国様式を重視した釈奠が行われるようになった。

発表者は近年、久米至聖廟の歴史と現代的状況に関する研究を進め、近世期の釈奠の在り方を再検討するとともに、戦後に再建された至聖廟・明倫堂、それに併せて復興した釈奠に対する中華民国（台湾）側からの支援・影響などについて論じた［石垣 2019、他］。

他方、幕藩体制下の日本各地における朱子学を基本とした教育や釈奠については、明治期に編纂された『日本教育史資料』がまとめている［文部省（編）1903-1904］。また、特に江戸幕府およびその影響を受けた複数の藩における釈奠の状況については、須藤敏夫の研究がある［須藤 2001］。加えて、海外の研究者によるものであるが、中国・孔子研究院の孔祥林らも、中国・台湾、朝鮮半島、ベトナム、東南アジアや欧米諸国に加え、日本各地の孔子廟および釈奠の概要を整理している［孔／孔 2011］。なお、同書には「琉球的孔子廟」と題した章もあるが、そこでは孔らが参照した釈奠の祭品や式次第（儀注）に関する史資料の出典が明記されておらず、また、近世琉球の国学や釈奠の際の楽・舞に関する理解などに、いくつかの問題点もみられる。

本発表では、先行研究や発表者のこれまでの研究成果を踏まえ、近世日本の釈奠と琉球の釈奠との比較を試みる。発表者はその際、祭祀対象、祭品の内容、祭礼の式次第（儀注）、楽・舞などに注目した。こうした比較・検討からは、近世日本では幕府主導の下、琉球と比較しても劣らない儒学振興や釈奠実施が推奨されていたこと、ただし近世日本の釈奠では各種の「日本的」な改変が施されていたこと、中国との冊封／朝貢関係を背景として中国様式を重視した琉球の釈奠は近世日本と比較して特異であったこと、近世琉球は孔子廟や釈奠に関する情報を日本側から求められる存在でもあったことなどが明らかになった。

《主要参考文献》

石垣　直 2019「琉球・沖縄における釈奠の歴史と現在：久米・至聖廟の事例を中心に」
　　『南島文化』第 41 号（沖縄国際大学南島文化研究所）
糸数兼治 2003「琉球における孔子祭祀の受容と学校」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 106 集
須藤敏夫 2001『近世日本釈奠の研究』思文閣
真境名安興 1993a「沖縄一千年史」『真境名安興全集』第 1 巻　琉球新報社
―――― 1993b「沖縄教育史要」『真境名安興全集』第 2 巻　琉球新報社
文部省（編）1903-1904（1890-1892）『日本教育史資料』全 9 冊　冨山房
孔祥林／孔喆 2011『世界孔子庙研究』（上）・（下）中央編译出版社

【25 日　14：40～15：10】

伊勢物語に登場する「いひやる」を語源とする琉球語について

玉城 弘（浦添市文化協会沖縄語部会）

在原業平が主人公とされる十世紀初頭の作品、恋歌物語「伊勢物語」全百二十段がある。その内、十一段中に「歌を詠む、ことばをおくる」等の意味を有する「言（い）ひ遣（や）る」という語が登場する。琉球語では「言遣ゐ（いゑぇい、iyeeyi)」と音韻変化して、その意味は「案内する、ことばを伝える、届け物をする、安全、豊穣祈願する」等、多面的に捉えられ広義に解釈されている。

筆者は、２０２０年には「ユイサーの語源とその派生語について」で、「言ひ遣る」から派生した 26 用例、２０２１年には「おもろさうしに見られる『きこゑ大きみ』の「きこゑ」及び、関連語の語源と琉球語の形成について」、7 用例、計 33 用例（26 + 7）を発表した。

本発表は続稿として新たに 8 用例を発表する。そしてこれら各用例が「伊勢物語」に登場する「言ひ遣る」から転訛した琉球語であることを論証する。具体的には次の 8 用例である。「牧港（まきみなと)」、「イヤッ（石割の道具)」、「いけぐすく」(『おもろさうし』第 16－1150）の「いけ」、「伊地（いじ)」、「八重岳（やえだけ yaedake)」、「ちゑねん」(『おもろさうし』第 19－1307)、「いとかず」(『おもろさうし』第 18－1276、糸数グスク)、「糸満（イトマン)」。

語源を研究する事は、言葉の発生史、地域の生活様式を知ることであり、極めて大切である。琉球語の固有名詞、名詞は地域の風土、環境、歴史的背景等によって表現された言葉で、そういう意味においては言葉には命が宿っていると言える。しかし、「おもろさうし」に表記された用例は、実際の三母音的琉球語が五母音的日本語で表記されているため、意味や音韻において大きな乖離が生じている。筆者が今までの用例でも明らかにしたように、琉球語、すなわち、琉球文化の原点は「気」によって支配されているものが多い。

特に「おもろさうし」にみられるように実際の琉球語である「チフジン（気言遣大君、chi-iyee-ufu-jiN)」は、邪気を祓い、豊穣を招く大君の意味を有するが、一方において「きこゑ大きみ」とは単なる「名高い」「音に聞こえる」という意味で解釈されていて、琉球語の「チフジン」とは大きな違いがある。

２０２０年の用例「ゑぞのいしぐすく」の「ゑぞ」、「ユイサー」、「ヰーヤー」、また、２０２１年の用例「きこゑ大きみ」の「きこゑ」、「ちーびし」の「ちー」、本発表の「まきみなと」の「まちなと」、「いとまん」の「イクマン」などを論じたように、口蓋化現象、また、［ａｉｕ ・ ｉｕ ］、e→i、o→u の規則変化等の法則性は、実際の琉球語、漢語音との複合語に画一的に適用するのは無理であることを論証する。

【25 日　15：15～15：45】

琉球宮古語の特殊な「中舌母音」の調音法

野原 優一（沖縄文化協会）

琉球宮古語の、いわゆる摩擦を伴う特殊な「中舌母音」については、ほかに「ｚ音」説（ネフスキー）や、「舌先（舌尖）母音」説（崎山理、かりまたしげひさ）、「舌端と歯茎および奥舌面と軟口蓋という２つの狭めをもつ母音であることが推測される」（青井隼人）など諸説があり、論争は未だ終結に至っていない。

この特殊な「中舌母音」がどのような調音法でできる音なのか、宮古で生まれ育った者として、ネイティブスピーカーの立場から、その調音の実際をより正確に伝えようとするのが本発表の趣旨である。

話者は内省によって一定の舌の形をある程度認識できる。しかし、その認識が正しいか否かは客観的に実証されなければならない。そのため、原始的な方法ともいえる身の周りにある道具類（歯間ブラシ、糊、食品着色剤、義歯、ファイバースコープ）を用いてその実証を試みた。

「舌先（舌尖）母音」説は、この音の調音法を、「[s,z］の位置での舌尖による」（崎山「琉球・宮古方言比較音韻論」1963)、または「口蓋への舌先の接近による」（かりまた「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」1986）としている。両者に共通するのは、調音に舌尖、舌先が上に向かうことである。

しかし、私の場合、この音の発音は舌先が下を向く。舌先（舌尖）が上を向くか下を向くか明らかにするため、この音を発しながら上歯と下歯の間から下歯の先に接する舌の部位に印を付けてみる。舌先が下を向けば印は舌端に、上を向けば舌端裏に付くはずである。その結果、印は舌尖から 4 mm ほど離れた舌端面にある（後続する単音で短くもなる。歯間ブラシ、塗料使用)。3 年ほど前に同郷の知人にも試した。結果は同じであった。

このほか、義歯やファイバースコープなどを用いて検証を試みた。その結果、この音は次のような調音法で作られると判断される。

１，唇の形は平唇で、両唇は触れる程に小さく開き、左右の口角を軽く引く。

２，舌の動きと形は、次のとおりである。

①舌先（舌尖・舌端）は下向きに下歯裏に付く。

②下歯に舌先を押しつけ、そこを力点に反作用力で舌を盛り上げる。舌筋の収縮, 口角を引くなどが連動する。＊無意識の舌筋運動

③舌面は歯茎後部、前部硬口蓋に接近または接触し、前部硬口蓋を調音点として摩擦を伴う特殊な中舌母音［ᶻï］が作られる。

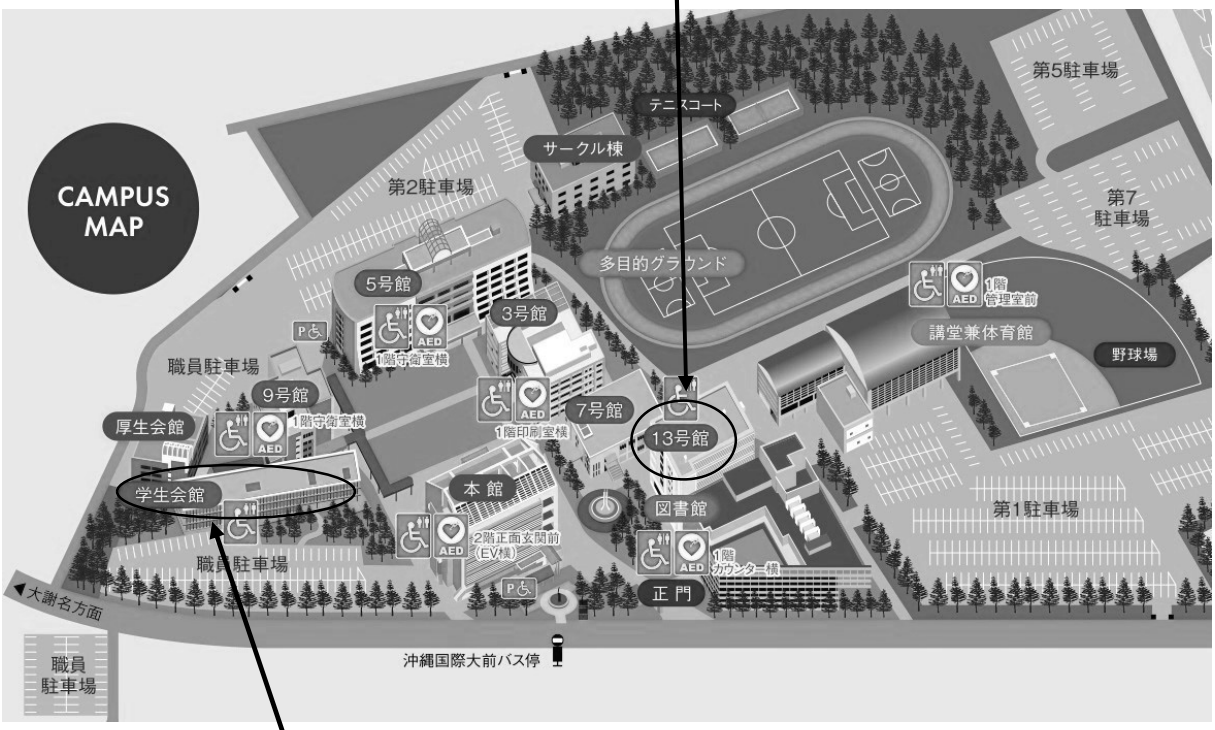
④奥舌は両側舌縁が上歯茎に接する（パラトグラム)。奥舌の中央部はやや凹んで、気道空間を広げる。

結び：複雑に調音されるこの特殊な摩擦母音は、前寄りの中舌と前部硬口蓋で調音される母音である。［ ｓ,ｚ ］とは調音法に違いがある。

なお、去る 4/27～4/29、現地調査（15 地点）を行った。その結果も報告する。

◆会場案内

研究発表 会場：沖縄国際大学 13 号館 ３階



祝賀会・懇親会 会場：沖縄国際大学 学生会館 ２階 食堂

◆入会案内

△　沖縄文化協会は、沖縄の文化を研究紹介し、その進展に寄与することを目的とし、広く沖縄研究者および沖縄に関心を持つ人々を会員として運営されている会です。

△　本会は、上の目的にそって、研究発表会、公開講演会、機関誌『沖縄文化』の刊行、沖縄文化資料の蒐集、複製、刊行などの事業を行っております。

△　所定の会費を納めれば、どなたでも会員になれます。年間会費 5,000 円（誌代２冊分を含みます)。

△　会費は振替もしくは現金為替で、下記の所へお送りください。

〒903-0815

沖縄県那覇市首里金城町３-６

沖縄県立芸術大学芸術文化研究所

鈴木耕太研究室気付

『沖縄文化』編集所　　電　　話　０９８（８８７）２６５２

振替口座　０２０３０―５―２５１７０

ＵＲＬ　http://okinawabunka.c.ooco.jp/